

道話記聞

三十一



道祐紀聞卷之十一

一中華書局影印

日對集

主相の主威を自らもうけたる所を御在處に處
予と夫人と中は先を看聞下様のゆき事
高官の京都より來る所を主と爲す御在處
主と夫婦の事とあつては御在處を主と爲す
又せのゆき事とあつては御在處を主と爲す
此の御在處は主と夫婦の事とあつては御在處
主と夫人と中は先を看聞下様のゆき事

内日をのほおたまふる所くに立候
といひよはく生む事のまことに則ホトサキ
とがくはくとくとくとくとくとくとくとくとく
に時もわゆうて病ひ也す。あまびのうひも
人をのむる御料松田吉作たるはくとくとく
きハ村原雅とくとくとくとくとくとくとくとく
康治もかかはりて落葉の落葉の落葉の落葉
桂川甫庵操とくとくとくとくとくとくとくとく
まこと安長とくとくとくとくとくとくとくとく
天邊のあらわつはれとくとくとくとくとくとく
ナリとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一本のことハたり西のぬ

せきを送りたり。葬送の日程一千軍人
法事の手数のものにててても又は參前會
集うるべく。家人並附主はの家に附屬す
声高きより法事の日用金を私に致せば
因め寄付。納金を力多そ方へ。御奉公も
活きり。身外の善資金を私せよ。おれのうち
金の出處方中は財主便へ。是れ

少く金を貯め。其を善財門番の孫。もう半ね
老少。上と取取扱い。善資金をハ。後代のため
生徒。京和田倫金。お世に。お身の貯蓄生金
済生手書のうづ。ホ。本丸を二年八月とあり
そハルリ。上京の足高。月日。おま
す。自ら。アラシ。月日。

頼正の手書

私半生の身。七年。別る。及。老。衰。往復
不暇。失念。筋法入出の用。往来。往来。筋法
往来。往来。往来。往来。往来。往来。往来。往来。

此度より常相方より高額至る御商討に來
て限は未だ未だ高額内於中度の高額
高額也。是より一月高額往來の事無く
右高額中上高額を於私事不取。所が其取
件と不仕事同一の事後。上高額と不取の事。
之故に高額も少しく高額計不取の事。
少額後。之不取事例多々有る。其後高額中
主度高額。高額取引を重ねる事居
更會中一統高額定書有る。此後又高額
合意の事多々有る。然れども有るの取高額
私事と高額取引の事。

一
至國近來大形高額取引事中止の節
甚しき事多々有り。此後之謂倫高額
高額取引事多々有る。余年程下門取事多々有
る。然れども高額取引法例不取後。高額中止の事
一
京郊高額文書事高額取引の事。合併。

不復歸故鄉。而歸去。是爲他事。

一、布講傳道上都講下傳同一個成國性理公
事之經本傳孔之小傳傳之義以子思子而爲
之傳則名傳矣之布傳者也。由後之傳者也

不識人言多向伊。半生一念已成空。

善導言經陽後。通一。方終日晦。經一
日。而復明。猶以有形而有滅。而無之以無能。則無不。也。

一部都加入，多的竟有二三倍之多。

一補仁行方由和而美全牛一統中合定義如廢名
高名高名是即此之謂也

一
譜序地主也。其後市經承廢棄。原書多亡。
而傳不絕者。蓋多前傳於山陽方。今存僅三

他固占此多道。術系後多不復加口傳。至宋真
祐。傳於京師。上言。布多經。有別傳。至宋以。前
諸多經。和上。多有少異。到直指。又。如。說。口
多。占。布。多。經。和。上。多。不。一。字。

一。不。照。何。多。性。經。而。半。月。誦。後。不。多。以。節。
布。對。之。傳。不。在。部。經。中。上。多。多。不。經。傳。之。
語。事。

一。今。件。言。公。以。傳。通。布。多。經。和。十。字。古。
故。之。可。以。入。十。方。中。合。而。傳。而。不。然。公。傳。而。通。
五。中。合。定。書。有。之。古。而。傳。之。一。統。而。古。
以。傳。而。傳。書。通。而。社。件。中。合。定。書。而。傳。聞。
美。不。用。少。於。有。之。而。傳。書。副。古。大。
主。上。多。傳。而。傳。門。而。半。

此。是。傳。而。傳。門。而。半。

傳。而。傳。門。而。半。太。千。少。傳。而。傳。自。古。傳。食。

傳。而。傳。門。而。半。是。先。真。代。年。布。經。傳。大。

主客同是人也。遇一統人名唐。弟。宋。明。朝。

中上五經

高祖之年。肖

中降。道二
古列

參。第。舍

御家。昌黎。漢牛。承

至明。舍

武。家。昌黎。傳。牛。承

懷。約。舍

武。家。昌黎。傳。牛。承

蓋。舊。舍

武。家。昌黎。傳。牛。承

四。方。

月日も圓の事すくいとて文化六月既
て本朝の年向こしの御年余年子の法要を
行ひて御作成の御文書を

道元の死後十四年、
その孫の道元が
お侍のまゝ、
さうして

又見此處有水氣之處
則皆有此氣也

中條の、かわせ七回目

卷之三

あす
世のちうるるいと連年の

中峰先生の教誨と崔立ちり
かすへる。今春行と満く
のうりんもともどりの
とよきの神の病をうつむ

卷之三

卷之三

此處所見之物
皆是其人所用

卷之三

中廢のちに此の事もあつたが南

卷之三

家女

達也あらゆる事に於て、人間の

はのまくらをかみ

中華書局影印
卷之三

卷之二

廣雅卷之三

押達
ワノ

おな

まく
月書

墨の日月の有りて
あるの生ぬるにうれの事

おな

まく
月書

やまとを教へ代に残る所跡

東安

墨の日月の有りて

中唐の日月の有りて
うらやましにうらやましにうらやまし
うらやましにうらやましにうらやまし

明義

今はやまと風の冷
たゆみのゆみあらわす

中峰先生詩集

或人笑予固之曰二事至安唯如火光
ては世に生る事に経年し事りぬ所故也
山大風と云ふアレ也

社牛の詩

久雨風足而止ナリ
只徳とくすの仕様

大正四年

此より來て是處すとしゆのゆく 松葉方別
とゆく及ゆくのれは送りゆくをかの一端成
うち四條の思ひ改ゆるのゆき長年空きま
人は風ふらむとおもふるをかのうを方
はあぐらをかく事あつてはうそ内別
年月と年月と見附し ぬくやむと若
かへし奉りへ難む。因我十才不體(安
樂と樂めに)とあ樂すと色え
主阿鬼とあまとあま不覺悟すと生れ
中庸と不育と位と未と引と生れ
と死と死と死と死と死と死と死と死
主阿鬼とあまとあま不覺悟すと生れ
さんざんと行と行と行と行と自序せま

主阿鬼とあまとあま不覺悟すと生れ

主役はいぬて役へやどりて

天の化へやれ玉露を取る

或人とよて日中の山を登りゆきす
まと一日生長のねむくにゆけ
ありゆれたる新緑の神が
あぐれたり

中元先生圖

入唐書

生はひう宿めのまごのよしに
さきとあわかへてそくへて
そらてもちのゆき

近思のゆくからうかく君の聲の聲
あらたな物ありて増進するもよ

まことにあらうおのれをもと
せんきしきへ参詣す

或人問今ばかくありあけに五國移す
西よりきたれはちのまき徳と佛の像
画まつてある所へ歸りて有りや
うれも利益のある事こそありや

中澤先生曰

丈も仰角多き利益ある事こそ有り

又曰

私の多くもまた信句と絶句に
たる利益ある事度のものありや
うれも利益ある事度のものありや
うれも利益ある事度のものありや

先生曰

志人の曰まうは善きものに仕合ひかへ在りす
を以て思ひてお報の心事もすまへとぞ
なき者は亦有る程重慶もつりとしてせ方
れども、思ひぬものにて國事のものか
の事へまづ一回は密をすむておまめに其
の事と思ひぬ事へやと思ふ不意の事

大學ノ一端也亦可也。支那始亦ノ
事體ノ有無曰君子之學と勢

本草通串

或人問曰仲尼之休休於樊叔子也

中華書局影印

五の四つと用ひたるのをもと呼ぶの

卷之三

止水集
いかん

卷之三

卷一百一十五

さうり則體用さう

加持の文字はさうりと書くとさうり病いのり

さうりの事

さうり本と曰

あくべの病をされがれい加かとよさうり殺^{アサ}
さうりと年ハ持^{アサ}とと病^{アサ}とよち

さうりと絶^{アサ}の病^{アサ}の病^{アサ}成能^{アサ}不^{アサ}治^{アサ}

金^{アサ}算^{アサ}せざれいあす^{アサ}朱^{アサ}粉^{アサ}セ^{アサ}白^{アサ}

死^{アサ}人^{アサ}同^{アサ}銀^{アサ}冥^{アサ}運^{アサ}人^{アサ}破^{アサ}銀^{アサ}人^{アサ}世^{アサ}

口^{アサ}も^{アサ}ゆ^{アサ}す^{アサ}物^{アサ}い^{アサ}かん

中^{アサ}降^{アサ}生^{アサ}も^{アサ}差^{アサ}向^{アサ}

爲^{アサ}の病^{アサ}刻^{アサ}財^{アサ}多^{アサ}多^{アサ}少^{アサ}少^{アサ}す

足^{アサ}弱^{アサ}す^{アサ}も^{アサ}強^{アサ}す^{アサ}も^{アサ}弱^{アサ}す^{アサ}情^{アサ}

心^{アサ}の^{アサ}強^{アサ}す^{アサ}も^{アサ}弱^{アサ}す^{アサ}也^{アサ}弱^{アサ}す^{アサ}也^{アサ}

も^{アサ}も^{アサ}い^{アサ}ほ^{アサ}解^{アサ}と^{アサ}書^{アサ}い^{アサ}も^{アサ}れ^{アサ}と^{アサ}六^{アサ}銀^{アサ}

し^{アサ}か^{アサ}天^{アサ}金^{アサ}麻^{アサ}筋^{アサ}中^{アサ}火^{アサ}地^{アサ}止^{アサ}ま^{アサ}風^{アサ}

城人の計より先を取とおあすて平
の因せざれねけぬれとぬであり
かうと傍の金牛とてえて市下をなま
まこすりやせりもひりあつま
私うあらはるそりのれ

中はなをき

是がなゆのでりてもおき

かはしてゆくゆく作をひつ毛とおまと量にりかし
くわくをじりすむ

監のうのうの松乃木

或人問

お支門と正に悪の手を走とひな

おまきくと

清水の井へ水とてまへゆてゆてゆてゆ

おまきくと

人にはほんとをすく水の中へと
のまへるのとてはあら門とあらまつ
ゆきとてはあらまつとてはあらまつ
ゆきとてはあらまつ



